

【表現学関連分野の研究動向】

日本文学研究(古典)

西山 秀人

2020年に発表された著書・論文の中から、とりわけ三代集時代の和歌表現に関するものを紹介していきたい。

今期の研究成果として特筆すべきは、室城秀之氏『和歌文学大系46 古今和歌六帖(下)』(明治書院)の刊行である。2018年既刊の上巻に続き、本書では第五帖・第六帖の歌に丁寧な脚注を施す。石塚龍磨の『校證古今歌六帖』に頼っていた稿者の学生時代からすれば、最新の成果を取り込んだ全歌注釈の完結はまさに隔世の感がある。現在注釈が進行している福田智子氏「出典未詳歌注釈稿」、古今和歌六帖輪読会(平野由紀子氏代表)「全注釈」の完成も期待したい。

久保木寿子氏『和泉式部の方法試論』(新典社)は、これまで等閑視されがちであった家集の群作歌に焦点をあて、和泉式部の多様な表現性を検証することで、その方法意識を明らかにする。勅撰集の陰に隠れた和歌史の「伏流」の系脈を探ろうとする姿勢は、前年刊行された武田早苗氏『平安中期和歌文学攷』(武蔵野書院)とも共通する。

勅撰集のみならず私家集や歌合にも目を配り、和歌表現の側から『源氏物語』の表現特性を明らかにしようとしたのが、瓦井裕子氏『王朝和歌史の中の源氏物語』(和泉書院)である。一条朝の和歌、とくに女房詠の表現傾向と『源氏物語』の叙述との接点を探り、新たな解釈を提示するという行き方は、今後の表現研究の一指標となろう。

高橋秀子氏「『うつつほ物語』の歌と安法法師の歌—出家者に関する和歌表現—」(『国語国文』89-2)は、『うつつほ』所載歌と河原院庵主、安法法師の歌には、出家という生き方に根ざした新しい和歌表現が用いられていることを指摘する。出家関連歌が新たなカテゴリーとして意識され始めた当時において、両者の歌は先駆的な存在であり、一般の社交詠とは一線を画しているという見解は、和歌史的にも興味深い。

これと間接的に関わる論考として、吉井祥氏「「和す」ということ—古代において返歌はいかに記されたか—」(『和歌文学研究』120)を挙げたい。平安和歌では「返し」といえば贈答歌だと理解されてきたが、実際には『万葉集』に見る「和する」歌、すなわち特定の誰かからの反応を期待せず、独立した歌に対して、後人が追和する詠み方も併存していることを手堅く考証。返歌に対する従来の理解に一石を投じる。

小橋龍人氏「「うゑしうゑば」考—古今集二六八番業平歌異文に関する一考察—」(『和歌文学研究』121)は、歌集中の異同はもとより諸資料、用字、語法に至るまで多角的な分析を施すことで、該句の原態が「うつしうゑば」であった可能性を提示する。本文異同の差異が和歌表現に与える影響の大きさを改めて痛感させられる。

藤原静香氏「曾禰好忠「毎月集」二番歌の一考察—海人への自己投影表現をめぐる—」(『女子大國文』167)は、当該歌が先行海人詠の表現を踏まえつつ、自らの不遇意識を諧謔的に誇張している点を指摘する。定数歌にみる虚構性の問題とも関わろう。

以上、不備や誤解が多々あることをご容赦いただきたい。(日本大学)